

# 満山凱丈さん

1923(大正12)年2月10日生まれ

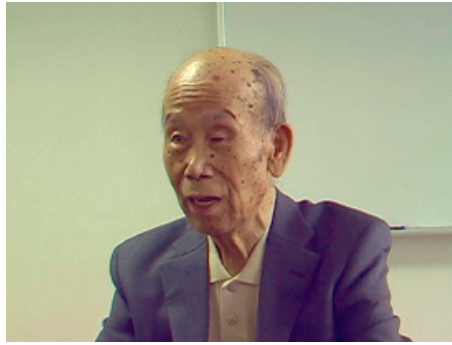
当時の本籍地 北海道

陸軍 歩兵(連隊砲)

第24師団歩兵第89連隊

最終階級 上等兵

沖縄



●1944(昭和19)年2月10日 歩兵第89連隊、連隊砲中隊に現役兵として入営、同年8月5日沖縄着。

●1945(昭和20)年4月1日 米軍上陸

艦砲射撃が始まって、島南東部の港川方面からの上陸に備えていた。米軍は北西部の嘉手納に上陸したらしい。港川沖では米軍が上陸する気配を見せては戻る陽動作戦をしてきたが、砲は発射しなかった。

●1945(昭和20)年4月27日頃 運玉森(ウンタママイ)の最前線へ

分隊長と一緒に砲の設置場所を決め、部隊がその場所へ移動。夜が明けて敵に見つかる大変なので、壕に隠れるということで、相棒と二人で壕の中にいた。疲れがでていた、とたんに眠たくて寝てしまった。やがて目が覚めると、外ではサトウキビが植えてあったのだが、無くなっていた。これは大変と分隊長のところへいくと、分隊長は生き埋めになっていた。手で掘ったら、分隊長の頭で、冷たくなっていた。

●5月2日 負傷

とにかく敵が憎かった。「ちきしょう、ヤンキーぶっ殺してやる」。射撃を始めて撃ちまくった。そうしている間に迫撃砲がきて、すごく撃って来た。砲の目の前で青光りしたと思ったら、ドーとなって、頭の中が真っ白になった。破片が目に入った。眼球が出ちゃった。後で教えてもらったけど、目が飛び出てたらしい。半分意識がなかった。

誰かが私を背負ってくれて、後方の医務室にいった。治療らしいことはしてくれず、追い出された。腕を切ったり、足を切ったりしていて、女の子が運んで捨てている情景だった。手榴弾で自決するのもいた。頭が痛くて、気が狂いそうだった。死ぬか生きるかの状況だった。

●1945(昭和20)年5月末頃 南部・与座岳(よざだけ)方面の死守陣地へ

死んでも陣地を守れという陣地。米軍から降参しろという勧告があった。断ると、米軍から激しい攻撃があつて、毒薬弾を洞窟に撃ち込んだ。私も負傷者は動くなと言われて、だんだん体が動かなくなっていた。これは毒ガスで、死ぬんだな、と思った。怖くはなかった。

思い出したのは北海道の両親と兄弟だった。私はいつの間にか気絶してしまった。どれくらい経ったかわからないが、遠くかなたに白い雲がふわふわしていた。目が覚めると、生きていた。手足は動かなかつた。正気になってきた。周囲のうめき声も聞こえてきた。壕が爆破されて、土砂に埋まったもの、死にかけているものの声が聞こえた。

しばらくすると、中隊長が奥から出てきた。切り込み隊の命令がでた。私の親友のMが指名された「満山、俺は行って来るから元気なな」と言われた。死にに行くようなことは私もわかつた。

負傷兵に、「壕を出ろ」との命令だった。ここで一緒に死なせてくださいと懇願した兵士もいたが、上官は「命令だ」の一言で追い出した。出て行っても真っ暗だし、全然わからない。音を出すと、すぐに機関銃が撃たれる。後方の洞窟に下がり、どんどん兵隊が死んでいく。家族の名前を言って、血だらけ、泥だらけで死んでいった。

生き残っているものだけが、4~5名残った。8月くらいかな。

●1945(昭和20)年10月まで壕生活

私は10年でもこもってやろうと思っていた。ヤンキーがとても騒いでいる時があつた。それが8月15日なんだろうと思う。

あるとき、昼間寝ていると、枕元で変な言葉が聞こえる。あれつと、気付くとアメリカ兵がすぐそばにいた。死んだ兵隊かと思ったのかね。血だらけ泥だらけだったからね。私は「やられた、殺される」と思って、恐怖を感じて、枕元にあつた拳銃を撃った。米軍が1人倒れて、他は逃げ出した。不思議なことに米軍が武装していないの。

翌日捕虜になったとき、中隊長は「あんたたちは戦争終了を知らずに、米軍を撃った。米軍には絶対洞窟に入るなと厳命していた。それなのに入って撃たれた。お前たちは戦争終わったのを知らなかったのだからこちらにも非がある。だからこれは公式には何もなかったことにする」と言った。

(取材日:2010年8月25日)